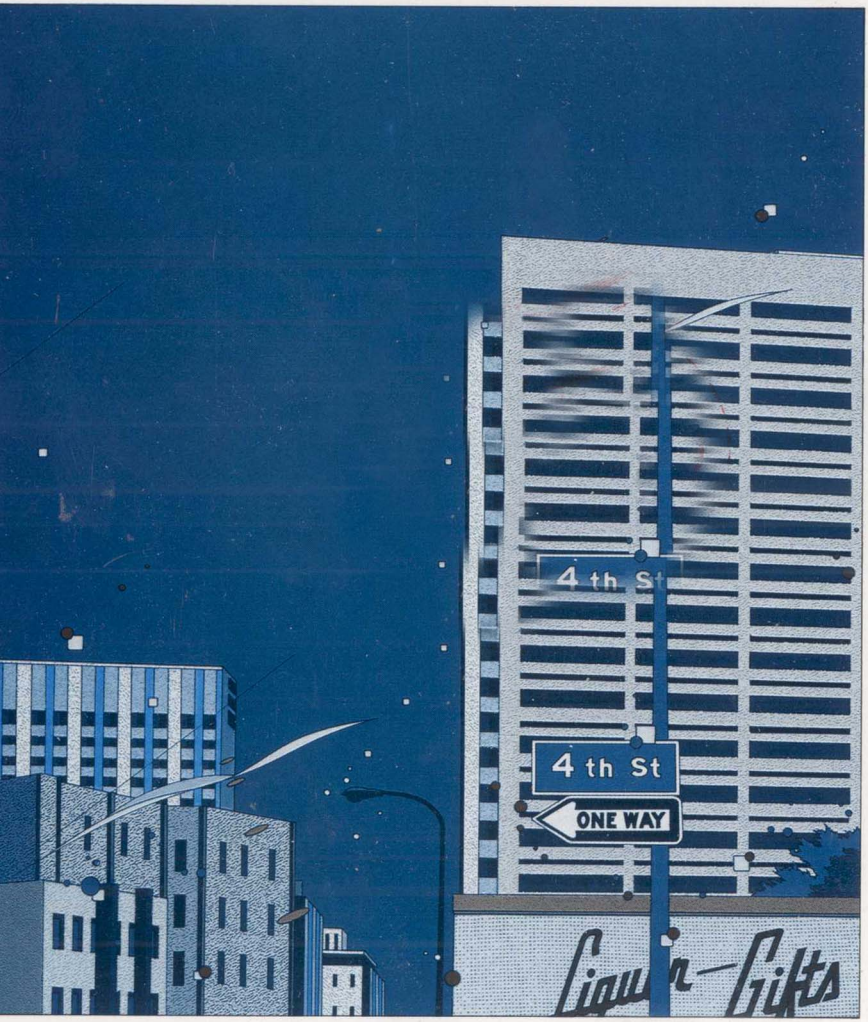
さびしい東京

海老沢泰久

しい東京

海老沢泰久



講談社

さびしい東京　　定価一〇〇〇円

第一刷発行　昭和五十九年二月十日

著　者　海老沢泰久
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽二―一二―二一
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替　東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えします。
© YASUHISA EBISAWA 1984 Printed in Japan

ISBN4-06-200945-5 (0)　(文2)

さびしい東京

さびしい東京　目次

何もしないで　5
婚約した男　31
生きるよろこび　51
胃潰瘍の男と住む女　69
最高の時　89
二つの世界　111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

夢からはじまる　129
情熱　149
幸福の定義　169
悩む男　189
再会　211
幸福の第三期　233
待っている女　251
川を渡る　269

装幀　鈴木英人

何もしないで

わたしは年下の女の子を連れて街の中をあてもなく歩くのが好きだった。
夕刻のビルの谷間や、真昼のニセアカシアの並木の下、夜の繁華街。デパートの屋上、文房具店、スポーツショップ、それから花屋の前などである。
わたしはそうしようと思えばいつでもそうすることができた。運のいいことに、大学の研究室で助手をしていたからである。毎日何人もの女子学生が出入りしていた。彼女たちの中には、自分と同じ年齢の男子学生で満足している子もいたが、彼らでは満足できない子も沢山いた。また早急にすべてを求めたがる男子学生を怖がっている子もいた。
わたしはそういう女の子たちを誘って、ときどき街の中を歩いた。そこでわたしは彼女たちに、彼女たちのためになりそうな話や、ためにはなりそうもない話をしてきかせる。彼女たちはそのたびにうなずいたり笑いこけたりした。ときにはコーヒーや食事を御馳走した。そういうことをするのもわたしは好きだった。
彼女たちは研究室の主任教授を信頼するように、わたしのことも心から信頼していた。だからわたしも彼女たちの信頼を裏切るようなことはしなかった。
その日もわたしは二人の女子学生を連れて渋谷の街を歩いていた。二人とも中学校の教師にな

るのが希望だったが、それよりも早く結婚して愛する夫のためにおいしい料理をつくったほうがよさそうな、かわいい子だった。

秋の陽が落ちかかり、そよ風が彼女たちのフレアースカートを揺らしていた。わたしたちはハチ公前から道玄坂のほうへ行った。二人の女の子はわたしにまとわりつくように、前になったり後になったりしながら元気よく歩いた。

「きみたちはいつも元気がいいな」

とわたしはいった。「でも気をつけなくちゃいけない」

彼女たちは二人で目を合せ、それからわけがわからないわというふうにわたしの顔を見つめた。

「あの二人をごらんよ」

わたしはわたしたちの前方から坂を下ってくる二人の男女に視線を向けた。二人は並んで歩いてきたが、男は不機嫌で、女はうつむいて重そうに足をひきずっていた。

「きみたちと同じくらいだ」

彼女たちはかわいらしい顔をくもらせてわたしの言葉を待った。

「わけもわからずに男と寝ると、あんなふうに元気がなくなるよ」

「嘘よ」

彼女たちは同時にいった。

「どうしてそんなこと分るんですか」

「知りたかったら後を尾けてみれば分るよ。もうすぐ夜になる。ウイスキーを一杯か二杯のむか

もしれないが、きっとそのへんのホテルにはいるよ。そしてまた同じ様子で出てくる」
わたしたちはゆっくり坂をのぼりつづけた。往来する人の数がいつのまにかふくれあがって誰とも肩を触れずに歩くことは困難になっていた。わたしたちは歩道の一番端によって歩いた。
そのときわたしがなぜ〈シルエット〉の中を覗きこもうとしたのか分らない。そこはガラス張りの喫茶店で、前に何度か行ったことがあった。わたしは行きすぎながらほんのすこし中を覗きこんだ。そこで中野英子を見つけたときの気持は、ちょっとうまくいいあらわせない。胸の高鳴りがすぐにやってきたことだけはたしかだ。
わたしはその前を行きすぎて、考えた。
二人の女の子が立ちどまってわたしを待っていた。それで自分が立ちどまっているのにわたしは気づいた。彼女たちに笑いかけ、また歩きだした。しかしわたしは彼女たちが何を話しかけてきても、何を見てもすっかりうわの空だった。一瞬のうちに中野英子の思い出がよみがえってきて、それにすっかり頭の中を占領されてしまったのだ。わたしは前へ進みながら、一分後にはきっと〈シルエット〉へ戻って行くだろうということを知っていた。
「すまないけど――」
と私はいった。自分の顔が二人の女の子の信頼するいつものしっかりした助手の顔であればいいがと願った。
「ちょっと用事を思いだしたんだ」
わたしが中野英子に最初に会ったのは二年前である。場所は赤坂のホテルだった。そこでわた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

しの友達の結婚式があり、彼女も花嫁の友達として出席していたのである。

彼女はわたしのすわっていたテーブルのすぐ左横のテーブルに、リボンのついたまっしろいブラウスにピンクのスーツを着てすわっていた。着物を着た七人の女たちが一緒だったが、わたしは彼女の顔を見て、これまでに会った女のなかで一番きれいだと思った。そこにいるだけで男の視線を釘づけにしてしまうような派手さはなかったが、落ちついていて、しっかりした自分というものを持っているようだった。もちろんほかの女たちのように、物ほしげな目つきでまわりを見まわすようなこともなかった。

披露宴は夕方からはじまり、二時間ほどで終ったが、二十人ばかりが集まって、わたしたちは花婿と花嫁をもう一度祝福するために近くの店へくりこんだ。そこでわたしは彼女と、偶然となり合わせにすわることになった。ウイスキーとカクテルが運ばれると、店はたちまちにぎやかになった。

時がたってから、わたしは彼女のグラスに何もはいっていないのに気づき、氷をいれてウイスキーを注ごうとした。するとピンクのマニキュアをした手がさえぎった。

「ごめんなさい。のめないの」

わたしはウイスキーの瓶を持った手をひっこめたが、話しかけるチャンスだと思った。わたしは一生懸命に頭をはたらかせ、何か気のきいたことをいうつもりだったが、口をついて出たのはバカみたいな質問だった。

「どこかにお勤めですか？」

だが彼女は笑ってくれた。

「ええ」
わたしは安心した。もう彼女を好きになっていたのかもしれない。間をおきたくなかったから、わたしはあわてて言葉をついだ。
「どんな仕事？」
また彼女はすこし笑った。わたしは笑って話をする女が大好きだった。いい雰囲気になりそうだった。だがわたしの判断はまちがっていた。
「どうしてそんなに他人のことをおききになるの？」
わたしはきまりがわるくなり、何でもいいから自分のことを話そうとした。
「失礼。ぼくは――」
「いいのよ。わたしはべつに知りたくないから」
わたしは黙った。彼女はわたしから視線を外し、女友達と話しはじめた。わたしの気分はそれからずっと落ちこんだままだった。ただいくらか救われた気持がしたのは、彼女がわたし以外の男ともあまり話をしなかったことである。
やがてすこしずつ席を立ちはじめるものが出てきたので、わたしもそれにならって立ちあがった。花婿と花嫁に合図しようとしたが、彼らはわたしのほうをなかなか見ようとしなかった。わたしはひとりで店の外に出た。
夜風が吹いていて、頬や首筋のあたりがひんやりとして気持よかった。わたしはいま出てきた店のドアをちらりと振り返り、それからまばゆいばかりの光のイルミネーションが輝く大通りのほうへ向って歩きだした。両手をズボンのポケットに入れ、自分の靴音だけをききながら。

「ちょっと、待ちなさいよ」
大通りへ出ようとした寸前に、うしろで女の声がした。振り返ると中野英子がこちらへ急ぎ足でやってくるところだった。わたしは立ちどまって彼女がくるのを待っていたが、そこで引き出物を店の中に忘れたことに気づいた。彼女は自分のをちゃんと持っていた。わたしは再び会えた彼女がどこかへ行ってしまわないようにと願いながら、おそるおそるいった。
「忘れものをしたんだ。すぐに戻ってくるからここで待っててくれないかな」
彼女はわたしの顔を見つめて口元に微笑を浮べた。
「ひょっとしたら、これのことじゃない？　あなたの名前を書いたカードがはいってるみたいだけど」
わたしは信じられない気持で風呂敷包みを彼女の手から受けとった。そのとき、さっきまでは気づかなかった香水のかおりがほのかに漂った。甘ったるいかおりだった。
「ありがとう」
「いいのよ、何でもないわ」
「ねえ、きみ。ちょっと待って」
彼女が背中を向けてまた店のほうへ戻って行こうとしたので、わたしはあわてていった。
「どこかでもう一度会いたいんだけどな」
彼女はわたしの顔を見てしばらく考えてから、静かにいった。
「そのときはわたしのほうからあなたの大学に電話するわ。それでいい？」
「オーケイ」

とわたしはいった。
わたしたちはそこで前とうしろに別れ、わたしは明るい大通りのほうへ歩いて行った。

五ヵ月か六ヵ月して、わたしは結婚を申しこんだ。口に出していったのは、日比谷公園のベンチに二人が並んで坐っていたときである。三月初めの土曜日の夜だった。
その日の午後、わたしは仕事を終えてから銀座にある彼女の会社まで迎えに行った。彼女の会社は大きな自動車輸入会社で、彼女はそこで企画担当重役の秘書をしていたのである。わたしたちは近くの喫茶店で待ち合わせ、映画を見てから食事をすることにした。わたしのポケットの金で同時に二つのことをするのはかなりむずかしかったが、わたしはうまくやった。それから二人で夜の日比谷公園に行った。八時ごろだった。わたしたちはすこしぶらぶら歩いてから、ベンチに坐った。土曜の夜で、いろんなカップルの姿が見えたが、夏のように沢山はいなかった。とてもいいチャンスだとわたしは思った。
わたしは彼女の肩にそっと腕をまわし、何度も唇を湿してからやっと申しこんだ。彼女は膝の上に両手を重ねて置き、まっすぐ前を向いたままわたしのつぶやきをきいた。何もいわなかった。
わたしは結婚を申しこむなんてはじめてのことだった。きっと彼女もはじめてで、どうしていいか分らなかったのだろう。
「きみが好きなんだ」
彼女の肩にまわした腕に力をこめてわたしはいった。

「きみみたいな人に会ったのははじめてだよ。きみに会うとぼくはいつもビクビクしている。どうしてだか分るかい？」

彼女はちいさく首を横に振った。

「好きになりすぎたからさ。ぼくはいつも別れの瞬間のことを考える。それくらいのことは勉強しているからね。いままではそのことを考えても何とも思わなかった。でも、いつかきみとそうなることを考えると、たまらないんだ」

彼女がわたしのほうに顔を向けた。暗がりの中でも彼女が眉根のあいだに皺をよせているのがはっきり分った。わたしは腕に強い力をこめてぐっと彼女を抱きよせ、唇を近づけた。

「駄目」

彼女は身をもがいてわたしをしりぞけた。それからわたしがしょんぼりしているのを見ると、わたしの手をとって両手でやさしく包んだ。

「やわらかくて、あたたかいんだな」

とわたしはいった。

「あなたの手だってそうよ。裸になって触ってもらったら、とてもいい感じだと思うわ」

「結婚しよう」

再びわたしはいった。

「ぼくはきみのために一生懸命はたらいて、きみはぼくのために料理や洗濯をする。それがいやだったら、いまのまま勤めに出てもいい。どんなことだってできるよ。ただまちがいないのは、ぼくたち二人が結婚したら、とてもすばらしいってことさ。新婚旅行は、そうだな——、外国は

無理かもしれないけど、日本だったらどこでもきみの好きなところへ連れていくよ」
「ちょっと待ってちょうだい」
と彼女がいった。「わたし、まだ何もいってないわ」
「返事はいまじゃなくていいんだ」
とわたしはいった。「一晩ゆっくり考えたほうがいい。明日きくよ」
彼女はゆっくり首を横に振った。
「いま返事をするわ。明日になってもきっと変らないと思うの」
彼女は指をからませたまま、ちいさな声でいい、それからわたしの顔を見ないように目を閉じた。この瞬間に、わたしはできれば大声で笑いだして、今夜の話はなかったことにしようといいたかったが、とてもそんなことはできなかったし、いうにしても遅すぎた。彼女の唇が動いて、言葉がでてきた。
「結婚はできないわ」
わたしはからんでいた指を離し、煙草を一本ぬきとって火をつけた。すぐ近くで砂利を踏みしめる音がきこえたが、そのまま遠ざかっていった。わたしは心の中のはげしい失意と戦った。
「好きな男がほかにいるのか？」
たっぷり五分ほどしてからわたしは訊いた。「それともぼくが金持ちじゃないからか？」
「そんなことじゃないわ」
彼女は困ったようにいった。「あなたはわたしがどんな女かってことを知らないのよ。わたしはあなたが思ってくれているような女じゃないわ。顔だって目がチンバでそんなにきれいじゃな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.